

感動一点の場

『雪の中の犬』
1973年 小川原 脩 画

本格的な冬の到来とともに、小川原脩がこの町・倶知安について述べた一節が思い浮かびます。

「ここでは＜白い＞季節と、＜白くはない＞季節の交替が、劇的で激しい変貌を示しながら進行して行きます。ここに居住する者にとって、即ち、本州からの移住者の子孫達にとっては日本人特有の繊細な四季感と呼ばれるあの感覚は、実のところ血縁史的に伝承されたそれに過ぎないし、または教育の場で与えられた知識に属するものに過ぎないのです。実際には＜白＞か、＜白くはない＞かの二季が、季節感の根底を振り分け、その二者交替のもつテンポの激しさが、この土地に居住する者たちを性格づけているのです。」(小川原脩 『画家』18号 1973年)

「この土地に居住する者」すなわち小川原自身の季節感そのものであり、またそれは今の私たちにも納得を与えてくれるものでもあります。1970年頃から、作品の主題は動物たち、とりわけ犬が中心となってきました。この作品も枯れ草が突き出た＜白い＞雪原に、1匹の犬。小川原が好んで描いた自由に振る舞う野良犬の姿はもう見かけることはありませんが、すぐその雪野原に、こんな顔をした犬が今も佇んでいるような気がしてきます。

文：沼田 絵美 (小川原脩記念美術館 学芸員)



おが 一大鋸 倶知安開拓に使われた道具

ふるさと探訪

441回

「北海道植民地撰定報文」(明治24年)によると、「倶知安開拓時のクッチャン原野は、一面大木の樹林であった。周囲四、五尺のドロ、六尺のアカガモ、一丈(十尺)ないし一丈六尺のナラなどで一反歩(約992平方尺)に四十二本ばかり生えている。」とあります。

開拓は、まず木を切り倒すことから始まったでしょう。四、五尺といえ約1尺20寸から1尺50寸、一丈六尺となれば5尺近い太さの大木です。使った道具は鋸か斧なので大変な労力を要したでしょう。開拓初期、大木は燃やして畑の肥料や薪にして燃料として使っていました。建築材としては、もっと加工が容易な細い木をそのまま使用したり、繊維に沿って割った割り板に加工したりして使用していました。生活が安定してくると建築材の加工は鋸を使った板引きを行うようになり、製材、製板が容易かつ正確にできるようになりました。板引き用の鋸を、大鋸または木挽き鋸といいます。風土館にも複数保管しており、最大のもので長さ82寸幅48寸とまさに字のごとく大きい鋸です。製材が容易にできると書きましたが、私が実際にやってみると、周囲60寸の丸太を1尺ひくのに3時間、休憩を入れると4時間かかりました。昔の道具を使ってみると先人の苦勞がよくわかります。



文：森脇 友行 (倶知安風土館 学芸補助員)

展覧会のお知らせ

■企画展示

「開館20周年記念くっちゃん美術展 第61回麓彩会展+くっちゃんART2020」

60年以上も前に小川原脩を中心として創立された当時の後志在住作家を核とする「麓彩会展」、そして羊蹄山麓と関わりの深い作家により構成される「くっちゃんART」。「地域」という共通のキーワードで、両展の作品を一堂に集めて開催します。

会期：開催中～2月11日(火) 会場：第1展示室

人気投票がつくる展覧会 小川原脩展「私が選ぶ小川原脩」

美術館開館20周年を迎えた昨年4月より、観覧者の皆さんに、小川原脩作品の中から好きな作品に投票していただき、全88点が選ばれました。人気投票の集計結果のうち、得票数が多かった作品と、得票数は少ないものの注目したい作品を展示します。皆さんが選んだ1点1点に思いを巡らせながら、皆さんが主役の「小川原脩展」をどうぞお楽しみください。※初日観覧無料

会期：1月18日(土)～4月12日(日) 会場：第2展示室

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

アート探訪くみて・きいて>36～ポスト印象派⑤～

「ゴッホとゴーギャン」

南仏のアルルで、短期間ながら生活を共にしたゴッホとゴーギャン。印象派に触発されながらも、独自の道を歩いた2人の個性豊かな世界を紹介します。

日時：1月11日(土)14時～15時

お話し：柴 勤 (当館館長) 会場：当館映像ルーム (無料)

■ギャラリー・トーク

小川原脩展「私が選ぶ小川原脩」より

新たにオープンする展覧会は、皆さんの人気投票により選ばれた作品が中心となります。展覧会場で作品を見ながら、学芸員のトークをお楽しみください。

日時：1月18日(土)14時～14時30分

お話し：沼田 絵美 (当館学芸員)

会場：第2展示室 (展覧会初日のため無料)

■アート・シネマ館

①「赤い風船」1956年(35分) / フランス (字幕)

友達になった赤い風船と少年の不思議なファンタジー。

②「白い馬」1953年(40分) / フランス (字幕)

深い絆で結ばれた白い馬と少年の物語。

新春のアート・シネマ館は、心温まる美しい映像2本からスタートします。

日時：1月25日(土)14時～15時30分

お話し：柴 勤 (当館館長) 会場：当館映像ルーム (無料)

ミュージアム 通信

小川原脩記念美術館 ☎21-4141

観覧料：一般 500円(400円)

高校生 300円(200円)

小中学生 100円(50円)

倶知安風土館 ☎22-6631

観覧料：一般 200円(100円)

高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は9時～17時

入館は16時30分まで

※()内は10名以上の団体料金

1月の休館日 毎週火曜日

1～5日(年始休館)

14～17日(展示替えのため)

2020年を迎えて

いよいよ20年代に突入しましたが、実はこの年代、北海道の美術においては、とりわけ重要な意味があります。といっても100年前の1920年代の話。小樽や旭川、札幌、函館、釧路、帯広など全道各地に美術グループが続々と誕生し、1925年には、全道規模の公募展「北海道美術協会(道展)」まで結成されるという、まさに現在の基礎を築いた時代だったのです。倶知安にまで伝わるこの20年代の熱い空気の中で、小川原脩もまた画家を目指し、東京へと向かうのでした。

館長 柴 勤